

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：17201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720034

研究課題名（和文） 近代宗教思想史におけるスピノザ受容史

研究課題名（英文） Acceptance of Spinoza in the History of Modern Religious Thought

研究代表者

後藤 正英 (GOTO MASAHIDE)

佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号：60447985

研究成果の概要（和文）：

近世初期において、スピノザは毀誉褒貶の対象であった。18世紀中葉から、徐々にスピノザの再評価が始まった。メンデルスゾーンはスピノザを客観的に理解しようとした最初の人物である。

メンデルスゾーンはスピノザの哲学をそのままの形で受容したわけではない。メンデルスゾーンはスピノザの哲学に修正を加えており、このようなスピノザ解釈の態度はドイツ観念論の若き哲学者たちにも共有されていた。彼らとは対照的に、まずヤコービは、スピノザの哲学を完全に我がものとした。この点については、今回の科研費で招聘したザントカウレン教授が明確に指摘した通りである。ザントカウレンは次のように述べている。ヤコービはスピノザの内在的形而上学を完全に首尾一貫した合理主義の哲学として受け取った。しかし、ヤコービは人間の自由に関して確信を得るために、そこから跳躍しようとした。

ヤコービの信仰概念は歴史的宗教の信仰とは異なり、人間の生活世界における行為の経験を指している。メンデルスゾーンは信仰という言葉を使用することを避けていたが、ヤコービの信仰とメンデルスゾーンのコモン・センスには共通点がある。

研究成果の概要（英文）：

In the early modern times, Spinoza was the subject of praise and criticism. From the mid-18th century re-evaluation of Spinoza proceeded gradually. Mendelssohn was the first to try to understand Spinoza objectively. Mendelssohn didn't accept Spinoza's Philosophy as it was. He made some modifications. This attitude was also common to young German Idealists. In contrast to them, in the first place, Jacobi owned Spinoza's philosophy completely. Prof. Sandkaulen, who was invited by this scientific grant, indicated this point clearly in her lecture. Sandkaulen said, "Jacobi took Spinoza's inner metaphysics as a perfect coherent rational system. But Jacobi tried to leap from this to be convinced of the human freedom".

Jacobi's concept of "Glauben" is different from a creed in historical religions. It designates an experience of practice in a human life-world. Although Mendelssohn avoided using the term Glauben, Jacobi's "Glauben" and Mendelssohn's common sense have something in common.

・交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目： 哲学・思想史

キーワード：国際研究協力、スピノザ、メンデルスゾーン、ヤコービ、ユダヤ教、啓蒙主義、ドイツ観念論

1. 研究開始当初の背景

2008年か2009年までの科研費(若手スタート・アップ)では、モーゼス・メンデルスゾーンを代表例として宗教に親和的な啓蒙主義の研究を行った。モーゼス・メンデルスゾーンは、ヨーロッパ文化史やユダヤ思想史など、狭義の哲学の枠組みを超えて、思想史的に研究してこそ、その思想内容や歴史的な存在意義が明らかになる存在であるといえる。

モーゼス・メンデルスゾーンは晩年にヤコービとの間で有名な汎神論論争に巻き込まれたが、この時期は、まさに近代ヨーロッパにおけるスピノザ受容の転換期であった。メンデルスゾーンやヤコービのスピノザ受容の内実はどのようなものであったのだろうか。私はこの問題を明らかにするために、メンデルスゾーン研究を継続すると同時に、ドイツからヤコービ研究の専門家を招聘することでヤコービに関する最新の知見を得ることを試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、18-19世紀の西洋近代の宗教思想史を、スピノザ受容史の観点から読み解くことにある。18世紀中葉まで、スピノザは様々な負のイメージ(無神者、汎神論者、運命論者、機械論者)によって語られる存在であった。スピノザの哲学は、モーゼス・メンデルスゾーンの時代に本格的な受容が始まり、最終的にはドイツ観念論を形成する原動力となった。スピノザの哲学には、西洋宗教思想の主流におさまりきらない側面がある。本研究では、西洋近代の宗教思想がスピノザとどのように批判的に対決したのかを明らかにしたい。その際に、本研究では、特にメンデルスゾーンとヤコービのスピノザ理解に注目す

る。

3. 研究の方法

本研究を行うために、基本文献を調達すると同時に、ドイツ国内の国立図書館を訪問し、18世紀末の文献調査を行った。研究成果については国内の学会や学術雑誌で発表した。ドイツでヤコービ研究の専門家から情報提供を受けると同時に、最終年度の2012年度にはドイツのヤコービ研究者を招聘して講演会を行った。結果的には、ボーフム大学のザントカウレン教授を招聘して講演会を開催した。

4. 研究成果

(1) 2010年度、2011年度の成果

2010年度から2011年度にかけては、特にメンデルスゾーンにおけるスピノザ受容史の問題について考えた。

2010年2月の日本スピノザ協会において、スピノザの『神学政治論』とメンデルスゾーンの『エルサレム』の比較研究をテーマとする口頭発表をおこなった。この発表は『スピノザーナ』第11号に掲載されることになり、2010年度に入って加筆修正のうえ提出した。この論文では、ユダヤの律法と近代国家の関係に関するスピノザとメンデルスゾーンの立場について、一致点と相違点の双方を指摘した。以下にその概要を紹介したい。

「スピノザとメンデルスゾーンは、どちらも、近代においてユダヤ教の伝統が直面した問題を直視していた。スピノザはユダヤ教と近代の違いの方を強調し、両者が共存することは困難であることを主張した。それに対して、メンデルスゾーンは、両者の違いを意識しつつも共存が不可能ではないことを示そうとした。メンデルスゾーンの『エルサレム』

とスピノザの『神学政治論』を比較することで、この問題状況に光を当てることができる。

メンデルスゾーンは西洋哲学の歴史の中にスピノザを位置付けるうえで大きな役割を果たした人物である。メンデルスゾーンの戦略は、ライプニッツ・ヴォルフ哲学によってスピノザの哲学を修正し、無神論の代名詞であったスピノザ哲学と有神論を調和させようとした。

『エルサレム』ではメンデルスゾーンはスピノザの名前を一度しか挙げていない。しかし、メンデルスゾーンはスピノザを強く意識しながらこの著作を執筆している。この点をはじめ明確に指摘したのはユリウス・グットマンであり、彼は1931年の論文でスピノザとメンデルスゾーンとの隠れた対話について指摘した。グットマンの指摘を受けて、後にアレクサンダー・アルトマンが詳細にこの点を論じている。

『神学政治論』と『エルサレム』の相違点と共通点について紹介しよう。シナイ山での啓示は律法に関わるものであり形而上学の真理に関わるものではないという点では、スピノザとメンデルスゾーンは共通する見解をもっていた。ユダヤ教は、真理を信じるように強制はしない。ただ、律法にもとづく形で行うように命じるのである。さらには、スピノザとメンデルスゾーンにとって、古代のユダヤ教における神権政治は、完全に純粋な意味での国家宗教であった。そこでは国家と宗教は完全に一体化していたのである。スピノザとメンデルスゾーンは、この点を強調することで、聖職者が神の名のもとに恣意的に権力を行使するような教会権力的な形態と古代ユダヤ教を区別しようとしたのである。

しかし他方で、両者は、神殿崩壊後のモーセの律法の有効性、特にその儀礼法の有効性については、異なる見解を抱いていた。スピノザにとっては、モーセの律法はユダヤ民族の現世的な幸福のみに関係しており、現在では法的効力を失ったものであった。

しかし、メンデルスゾーンにとって、モーセの律法は永遠真理に関係しており、個々のユダヤ人の幸福に対して永遠に効力を持ち続けるのである。」

さらに2010年12月には西日本哲学会で口頭発表をおこない、汎神論論争でのメンデルスゾーンの理性の擁護論を再検討した。この発表では、(1) ドイツ観念論哲学ではメンデルスゾーンは常にヤコービの対立像として理解されたこと、(2) ヤコービの友人のヴィーツェンマンが汎神論論争期に重要な役割を果たしたこと、(3) 独断的信仰を批判するメンデルスゾーンの主張の背景には啓蒙主義思想とユダヤ思想の統合された形

態を読み取ることができること、を指摘した。紙数の問題もあるので、ここでは(3)についてだけでももう少し詳しく述べておきたい。

信仰と理性をめぐるヤコービとメンデルスゾーンの間言葉の応酬には、宗教的なコンテクストが垣間見える場面がある。メンデルスゾーンは、ドイツ語の信仰(Glauben)という言葉肯定的な文脈で使うことを意識的に回避している。その理由は、メンデルスゾーンにとって、信仰はドグマティズムのニュアンスの強い言葉であったからである。

伝統的にユダヤ教は教理を定式化することを避けようとしてきた。ユダヤ教は、教理の統一性よりも、行為の統一性によって、宗教の連続性と同一性を担保しようとしてきた宗教である。したがって、律法に従って行為している限りでは、律法の解釈については自由なのであり、教理を統一し信仰簡条を制定するために公会議を開催する必要性を感じることがなかったのである。メンデルスゾーンによれば、モーセは「信仰せよ」と言ったのではなく、「行為せよ」と言ったのだ、というわけなのである¹。このようなユダヤ教に特有の解釈の自由という発想が、信仰という名のドグマティズムを批判するメンデルスゾーンの主張の背景に存在している。つまり、ユダヤ教は真理の認識においては徹底して自由である、という主張である。真理の探求においてドグマティズムを批判する点で、メンデルスゾーンの内部では、ユダヤ教と啓蒙主義のリベラリズムが重なり合うものとして理解されていたように思われる。

最後に指摘しておかねばならないのは、真理の独断論を批判し、真理の所有よりは真理の探究を欲すると主張したのは、まさに彼の親友のレッシングであったという点である。真理の独断論への批判は、『賢者ナータン』(1779)での有名な指輪の比喻の中にも見られる立場である。つまり、もはやどの指輪が本物であるかを決定することはできず、指輪にふさわしい行為をすることこそが求められているという、理想主義的なプラグマティズムの思想である。

なお2010年12月にはドイツ・イエナ大学のザントカウレン教授を訪問し、24年度の招聘に関する最初の相談をおこない、招聘に関する内諾を得ることができた。

その後、ザントカウレン教授はボーフム大学へ転出された。2011年12月には再度ボー

¹ Moses Mendelssohn, *Jerusalem oder über die religiöse Macht und Judentum*, hrsg. v. Michael Albrecht, Meiner, 2005, S.100.

フム大学を訪問し、2012年の来日に関する最終調整を行うと同時に、京都学派のドイツ観念論受容史に関するドイツ語での講演も行った。

(2) 2012年度の成果

2012年度はヤコービ研究の専門家であるドイツ・ルール大学のザントカウレン教授を招聘した。当初は11月の初旬に三つの講演会の開催を企画していた。第一の講演テーマは「ヤコービの『スピノザとアンチ・スピノザ』」(大阪大学の上野修教授と入江幸男教授の協力のもとに計画)であり、第二の講演テーマは「教養一疎外か和解か」(一橋大学の大河内大樹教授の協力により計画)、第三の講演テーマは「フィヒテの『人間の使命』—ヤコービの回答は成向したのか」(入江幸男教授と入江幸男教授の協力のもとに計画)であった。

最初の講演は、特定質問者として新潟大学の栗原隆教授を迎えて予定通り開催され、参加者との間で密度の濃い議論を行うことができた。しかし、残念ながらザントカウレン氏のご家族の事情により急遽帰国されることになったため、第二の講演は中止し、第三の講演では、私(後藤)が翻訳原稿を読み上げ、駒澤大学の久保陽一教授と上智大学の長町裕司教授が事前に用意していた質問を提起する形で講演会を実施した。

ここでは、本研究課題の中心テーマと関連する第一の講演「ヤコービの『スピノザとアンチ・スピノザ』」について、その概要を紹介しよう。講演の主題は、ヤコービ自身の「私のスピノザとアンチ・スピノザ」という表現に現れている彼の二重哲学の中身を明らかにするものであった。ザントカウレン氏は、ヤコービの哲学は彼の論争相手側の色眼鏡によって誤解されることが常であったため、彼の真正の思想を明らかにすることが重要であると主張する。

ザントカウレン氏によると、ヤコービはメンデルスゾーンやドイツ観念論の哲学者たちのようにスピノザ哲学の衝撃を回避しようとはせず、まずはスピノザの合理的形而上学の帰結を正面から受け止めたのであり、そのうえで、ヤコービはスピノザの哲学を理論的に「論駁」しようとしたのではなくて、人間的実践の経験の立場から、自由について確信を得るために、スピノザの哲学に実践的に「対抗」しようとしたのである。ヤコービのスピノザへの態度として「理論的論駁」と「実践的対抗」を区別すべきであるという指摘は、ザントカウレン氏の慧眼であるといえる。この論駁から対抗への移行こそが、ヤコービの主張する「死の跳躍」の内実であった。

スピノザ受容史の観点から見た場合にザントカウレン氏の指摘が重要であるのは、一方においてヤコービはスピノザ哲学の本質的内容を修正することなく受容したという点である。メンデルスゾーンであれ、若きドイツ観念論の哲学者たちであれ、彼らがスピノザ哲学をそのままの形で受容するのではなくて、一部を修正あるいは追加する形で受容したのとは対照的である。

ところで、ザントカウレン氏の解釈をそれ以前のヤコービ解釈と比較した場合の特徴は、ヤコービ独自の思想を明らかにしようとしている点にある。

ザントカウレン氏に先立つヤコービ研究者としては例えばクラウス・ハンマッハーがいるが、ハンマッハーは、ヤコービの特色をフィヒテの実践哲学を媒介にして浮き彫りにする方法論を取っており、ザントカウレン氏には不十分に見えるものと思われる。また、ヤコービの古典的研究として、ボルノウの『ヤコービの生の哲学』があるが、ボルノウの解釈は、死の跳躍の後にはじめて獲得されるはずの生の直接性の確信を最初から前提にしてしまっている点で、ヤコービの本来の意図を誤解させる危険性があり、ザントカウレン氏はこの点でもヤコービの立場を明確にするのに成功したといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. Birgit Sandkaulen, Jacobis “Spinoza und Antispinoza”, *Philosophia Osaka*, 査読無、8巻、2013年、23-26頁。

2. 後藤正英、「西谷啓治における神秘主義の問題」、『理想』、査読無、No.689、2012年、51-61頁。

3. 後藤正英、「スピノザ『神学政治論』からメンデルスゾーン『エルサレム』へ」、『スピノザーナ』、査読無、第11号、2010年、105-120頁

[学会発表] (計5件)

1. 後藤正英、「倫理をめぐるレヴィナスとカントの交差点」、京都ユダヤ思想学会・レヴィナス『全体性と無限』刊行50周年シ

ンポジウム、2011年12月18日、京都大学。

2. 後藤正英、Interpretationsgeschichte des Deutschen Idealismus in der Kyoto-Schule、ドイツ古典哲学研究所招待講演、2011年12月6日、ボーフム大学(ドイツ)。

3. 後藤正英、「最近のハーバーマスの宗教論について」、日本宗教学会第70回大会、2011年9月4日、関西学院大学。

4. 後藤正英 「汎神論論争におけるメンデルスゾーンの理性の擁護論を再考する、西日本哲学会第61回大会、2010年12月4日、鹿児島大学。

5. 後藤正英、「クリスチャン・ドームのユダヤ人解放論をめぐる問題状況」、日本ユダヤ学会第7回学術大会、2010年10月30日、早稲田大学。

[図書] (計5件)

1. 後藤正英、永田文昌堂、『光華会論集 第4巻』、「最近のハーバーマスの宗教論について」担当、印刷中。

2. バーンスタイン、翻訳：後藤正英他、法政大学出版局、『根源悪の系譜』、2013年、16-60頁。

3. 後藤正英、作品社、『臨床知と徴候知』、序論担当、2012年、13-26頁。

4. 後藤正英、角川学芸出版、『新しい時代を開く 教養と社会』、第六章「教養と宗教—対話の場としての宗教—」担当、2011

年、152-172頁。

5. 後藤正英、丸善株式会社、『宗教学辞典』、「理神論」担当、2010年、368-369頁。

[産業財産権]
○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

<http://www1.odn.ne.jp/gakuj/kyokai/spinoza.html>

<http://hegel.jp/>

<http://fichte-jp.org/>

http://www.ruhr-uni-bochum.de/philosophy/forschung_kdp/archiv_gastvortraege.html

6. 研究組織
(1) 研究代表者
後藤正英 (GOTO MASAHIDE)
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：60447985